

リベルテール

1 月 号



Libertaire VoL, V, No 2

無政府主義者の機関紙

昭和四十五年九月 四日第三種郵便物認可
昭和四十九年一月十五日発行第四十九号

定価一〇〇円(送料共)

リベルテールが創刊されたのは一九六九年十二月で、その創刊号には「アナリズムは永遠の思想であり、普遍の思想である。これを歴史的、地理的、社会的、経済学的に究明しようとする意欲的な若いリベルテールが全国的に、国際的に結ぶ機関である」ことを宣言した。それから三年、リベルテールはまだこの期待を実現しているとは言えない。しかしリベルテールは、アナリズムが自由、平等、友愛という昔ながらの三原則に立つて、最高の秩序アナルシーを実現しようとするアナリスト（リベルテール）のグループであることに変わりはない。したがって現代社会の階層的権力構造を、人間の狡知と欺瞞にもとづくものとして否定し、万人一人一人の生の充実を実現しようとする社会的な変革を目指すものであることにおいても変わりはない。

こうした変革への過程において暴力、非暴力の二つの手段が考えられる。しかし暴力に対して暴をもってすることが、如何にも勇壮で合理的で容易だとしても、暴力を用いること自体が他に対する権力行使であることを知るがゆえに、リベルテールは非暴力を立場とする。もちろん暴力と非暴力の境界は微妙だということ、非暴力は暴力主義以上に困難な道であることは承知の上である。この立場で連合し、連帯し、反権力、反戦の戦いを戦おう（三浦）

目次

巻頭言	杉藤二郎	1
理想との合体	青井知三	2
K君への米麵炭液	志津正治	4
過渡期論 ー下ー	清水修一	6
共産主義者とアナキストの対立	ホセ・ペライツ	

巻頭言

僕が生れたのは一九〇五年であるが、日露戦争がようやく終りに近づきつゝあった頃だと、僕は物心ついた頃に母親から聞かされた。その母はもう一片の木片となって、今は弟に見守られているが、その母がある時、八十何年の生涯に、三度の戦争に苦しまれたと、述懐するのを聞いた。三度の戦争とは、所謂、日清・日露・大東亜であるが、母の話によると、戦争のはじまる一年位前より、物資が急に高く、少なくなって、庶民の手に入らなかつたそうである。また、戦争が終つてからしばらくは、物が少いし、値段が高いので、サラリーマンの妻は、ずい分苦勞したものだそうである。

近頃では、物は沢山あつても、生産者が値段をつり上げる為に出荷を押さえ、庶民を苦しめる。政治家はその事を知りながら、知らぬ顔をしている。それにはこんな理由が秘められている。つまり、政治家は選挙の時に、ぼろ大な資金を必要とするが、その資金は、生産者によって賄われる。その為生産者は利益を一そう大きくする為、あらゆる手段を講じる。そのしわよせが皆、消費者におつかぶさる。

労働者は物価が上がる度に、ストライキを以て賃金アップを計る、資本家と労働者と馴合いで物価をつり上げるに等しい。それも、組織された労働者の話で未組織の労働者は、物価高の苦しみを味う。一口に言えば、資本家・組織労働者・政治家の三者は、ぐるになって底辺の庶民を、常に痛めつけているというわけである。

今日、アナキズムが全国的に見直されてきたことも、宜なるかなと思ふ。相互扶助・相互牽制も権力者のない世界でのことで、先づ世の権力者共をたゞきつづぶすことが、先決である。その上に建設されたものが、本当の社会である。我々はこの社会の建設を、どんなに時間がかつても、為し遂げねばならぬという、宿命のような願望をいだいている。お互いが個の解放をなしとげ、先づ自己の持つ何等かの権力が、他の人を侵してはいないか、よく反省してみなければならぬ。

大なり小なり省るところに前進もあるだろう。僕自身も、今一度前進する為の反省をしなければならぬと思う。

理想との合体

青 井 知 三

人間は針の穴をくぐり抜ける。すなわち、一点を注視して、全ての力をその一点にこめて、その一点を突破できなければならぬ、と思う。

不可能を可能にする情熱は、心のレンズによって徹底的に集中せられた光である。いい加減な集中でもって生きて行けること、生半可な歪曲した心（レンズ）の持主でも生きて行けること、このことをきっぱりと拒否しなければならぬ。

理想は野を焼き尽くす大火災、この一点が星火である。マッチ売りの少女におけるマッチ、そこに世界がある。

理想はすなわち目標であり、そしてこれは実在する物体である。

理想は常に現実的である。理想的行為者の行動は自然現象に属する。それは、人智（あさはかな・・・）の領域では、とにかく、ありえないのである。

「全力を投入して生きる」、これは理想的である。理想的であることは全て実行されるべきである。

理想のために殉死することが人間の最高の目標である。理想讃歌は尽きない。芸術がそれだ。

理想的行為者は、全宇宙との一体感を実感している。理想的行為における認識の果す役割は看過できないものがある。

自分の行為の社会的な意味を知することは、もつと大きな行為をやるように自分を方向付ける。自分の行為の意味を知らない行為は、それ以上のものになる道を閉ざされている。

理想的行為は社会体制にとってはいずれにせよ天災である。

理想的行為は常に、社会体制を荷う人々に多少の害毒を与える。失なうべき何物をも持たぬ者（生きている限り、そんな人間はいないけれど）にとってのみ甘味である。

生命活動の全てが理想実現のための手段であること、そして理想そのものがバケツ一杯の水を要求しても生命活動の全てをもつてしてもコップ一杯の水しか満足できないこと、この事実を認めねばならない。

人間は欲求の全ての力を借りて理想の実在を予感する。食欲、性欲、睡眠欲、支配依存、対立連帯、殺人救命、

理想とは諸欲を超越して実在する欲求である。これと一体化して生きること、その時人は神になる。

国家と拮抗して生きる

君は暖かい部屋と人工の光を選ぶか。私は寒風と荒野を選ぶ。集団を形成して栄枯盛衰をくりかえすことに何の意味があるというのであろうか。自分の生命を他人まかせにして生きて、それで満足なのだろうか。

人間は、たった一人で生まれて来たのであり、たった一人で死んでいくのである。だから、たった一人で欲求するのであり、たった一人で狂うのであり、たった一人で満足するのである。

行動の基本は、他人に向かっては滅私奉公であり、自己に向かつてはナルシズムである。

（アハハ、まるでカントだ）「汝の意志の格率が常に同時に普遍的立法の原理として妥当するように行為せよ」ただし、私の言う他人とは、体制的市民を含まない。真人民だけが人間なのである。

時に反省をする

ウソだ、丸でデタラメだ。私の言うことを為すこと全て一貫せず、支離滅裂である。私は全身悪徳、デマゴグ、

矛盾人間である。努力をせせら笑いながら努力せよと言いつつ、体制という幻想の椅子に深々と腰をおろしながら非体系の行動欲に駆りたてられている。そして突然狂気にとりつかれ、あと先考えずに行動してしまふのだ。大杉の文章に「正気の狂気」というのがあるが、まさにそれである。竹中労が、「人を狂わせるのは理性である」と言ったが、まさにそうである。体系と非体系の間を生きる、理性さえなかったなら私はこんなことは言わないだろう、蝶のように気ままに非体系そのものをわがものとしていられるから。この革命の時代に、制度に執着することと命乞いをするとは実にわれながら情ない。ああ、死にたい。

ああ、やっぱり私はデマゴグだ。実は全然死ぬ気はないのである。体制が危機にさらされればさらされる程、私はきつと体制的になろうと欲するだろう。反革命者としてギロチンにかけられることをわざと望むだろう。私は人民の手の中で死にたいのだ。

われら不条理の子よ、などとなまじきことは言うまい。莊子の言う「道」だ、とも言うまい。他人と同じことをやることはできない。教条はわれの右岸にあり、バクチはわれの左岸にあり、われはただ流れる河である。やったことを書き、書いたことはやる、それだけだ。

K 君への米麵炭液

——刺激を拒絶するということについて——

志 津 正 治

自由であることは他のどのような事よりも重要な事だ。それは主体が個であることを示し、個を個たらしめるからだ。主体が個であること、この事が個である私のこの雑文の始まりだ。

私はどのように言われようとも、いちょうと結んでいちょう人という一つのものとなることはできない。いちょうの木が小さな木であるなら、私はこのいちょうの木を私と同じように行為の中にまき込むことができるかもしれない。しかし私を越える何倍、何十倍といういちょうの木は、私にはどのようにすることもできないのだ。個であること、個であるがために他と異なること、他と異なるがために個である私は私の意志によって行為しようとする。

私は私の意志によって行為するがゆえに自由である。こんな言葉は国家意志としての帝国主義的侵略を繰返す日本では寝言でしかないことを私は知っている。しかしこの言葉、この言葉を中心に少し雑文を書かせて欲しい。

私は自由だ。この言葉を知りな人の強がりを取らえようが、こう言うことによって己自身を位置づけようとする人の言葉を取らえようと読むものはかつてだ。

この言葉から私は私が不自由である事柄を捜そうと試した。私は時に對して不自由だ。私は時をどうすることもできない。私はこれを認識は可逆的には新たな認識を生まない、と表現した。私はこれから「リベルテール45号」の変文を作ったのだ。

私は時を私に付随するものと理解した時、時を認識していく私の意欲、その意欲の理由を知りたいと思った。私には認識する私の意欲がわからない。

私は認識する。私の認識は私の時を作る。私の認識は私とは関係なく認識し、私の時を作っていくようだ。私は他の人と時の認識が同じであることを結果の総体として時は同じく考えられる、と言った。しかし、私は私の認識とどうして峻厳に区別されないのだろう。

私は私の認識のこの行為をにくんだ。私は私の認識のこの行為から認識そのものを私の意志に取り込もうと考えた。

認識とは刺激に対する反応である。刺激は認識を生み、同義である時を生む。私は自由なのだ。私は私にこう言

東京ガス（斗争史の一コマ）

一九二七（昭和二）年三月二日、浅草統一閣で「東京瓦斯工組合」が結成された。

自由連合主義をモットーとする、屋外労働者の戦闘的組合であった。（『労働運動』第五巻第五号）

大衆党系の「東京ガス組合」もできたが、いずれも直属職工だけの組織であった。

一九三一（昭和六）年のメーデーを期して二営業所三派出所の常備人夫一〇〇名が結束し、「自由連合労働者自治連盟」に加入した。（『自由連合新聞』五月二〇日付）

六月八日、自治連盟のもとに東京ガス蒲田・麻布・四谷・野方・本郷がストライキに入った。翌日、蒲田営業所の二〇名は暴力団三〇余名におそわれた。麻布営業所も暴力団と臨時人夫三〇余名におそわれた。

（前掲紙、六月一〇日付）

うと、ばかばかしい事を考えた。私は刺激を拒絶しよう。しかし、私の認識は私の意志を無視し、共に時を生んでいるのだ。私は私が刺激を拒絶しても、私の認識が私の時を作っていくことを理解した。私はそこでばかばかしい事をこう言い変えたのだ。私は私の認識が時を作るのなら、刺激を拒絶する、そうして拒絶する認識が更に認識するのなら、それを抱擁して認識しなければならぬ、と。

やくざは言う。刺激を拒絶しつつ、拒絶する作為を廃して刺激を求めるのだ。作為なきとどう所にすら刺激を求める認識のある悲しさよ、と。

しらふになった時、私は私の自由が悲しく踊っているのを楽しそうに見ている。

☆☆☆

K 君、今度は君だ。君もおしゃべりにならなくっちゃあ。君がどこに由来するのか、君の行為がどこに由来するのか。今の君が虚空にある君を自から解剖して愉快にほおりなげるのだ。

天にましますわれらのお星様、私の指がつまんでいるお星様は、そらっ、ほんものか。

三浦さん、萩原さん、「リベルテール」の皆さん、駄文ごめんなさい。

3. 過渡期と原始共産主義

マルクス主義によると、原始共産社会以降の史的展開は、弁証法的な「発展」ということになるわけであるが、原始共産制以降の史的展開は、奴隸制の出現とその展開であり、搾取・抑圧機構の高次化・合理化の過程であり、このような展開が「発展」や「進化」などであろうはずはない。

そして、この「抑圧・搾取機構の『発展』」が「弁証法」的であるか否か、は問題ではない。

スターリンは、歴史の弁証法的発展を勝手にのりこえようというのは、人間のすることではなく、カモシカのことである（社会主義か無政府主義か）といったが、我々はまさしくカモシカの如く一氣に原始共産社会へと飛躍しなければならぬ。

これこそ、まさに歴史の「発展」であり「前進」である。

石川三四郎は「原始生活」を主張したが、彼の「原始

生活」は文明社会そのものを破壊し、原始共産制へ「前進」するものではなく、単に文明の補完物にすぎない。

バクーニンの「総破壊」は一切の文明を破壊するものであり、必然的に原始共産へ向うものである。

バクーニンの「総破壊」の思想を観念的に「権力に対する反逆」という次元で理解するのは全く誤りであり、アナキズムを衛生無害の思想に封じ込めるものである。

さらに総破壊は、世界革命戦争により、全世界の文明を破壊し、地球を「廃虚」とするものである。

原始共産社会は「総破壊」によってのみ、廃虚の上のみ建設される。

世界革命戦争の主要な武器は核兵器であろう。

そして原始共産主義とは低次の共産主義であり、すなわち過渡期の共産主義である。

4. 過渡期とアイヌ・モシリ建設

先進資本主義諸国（もちろんソ帝・中華帝も例外では

ない）において抑圧——被抑圧という関係は、ブルジョアジー——プロレタリアートという形に一元化することはできない。

先進国プロレタリアートは後進国人民に対して（そして国内・最下層人民に対して）明確に抑圧者、搾取者として存在している。後進国人民を搾取しているのは帝国主義ブルジョアジーであるより、むしろ帝国主義本国内プロレタリアートである。

日本において、国内プロレタリアートは東南アジア人民に対して、抑圧者・搾取者として存在し、又、在日朝鮮人、台湾人、さらに沖縄人、アイヌに対して「日本」プロレタリアートは抑圧者、搾取者として存在している。それ故、我々は単に「日本帝国主義」「ブルジョアジー」を打倒するのではなく「日本」という国家・民族・文化……、まさに「日本」そのものを亡ぼすのでなければならない。

「日本の滅亡」ではない「日本革命」は依然として東南アジア人民・及び国内被抑圧民族・人民に対して抑圧者・搾取者として存在し続けるだろう。

そして、日本を亡ぼす主体は、これら「日本」によって搾取され、抑圧されて来た人々である。

アイヌ・モシリは天皇制出現以前より日本に存在し、そして現在もその原始共産制を守り抜いて「日本」そのものと非妥協的に斗っているのである。

アイヌ・モシリ建設とは「日本」そのものを亡ぼし、原始共産社会を建設することである。

そして、在日朝鮮人・台湾人及び全ての最下層、被抑圧人民の「日本」を亡ぼす闘いは、アイヌ・モシリ建設へと向かうのである。

日本における革命は、「日本」の滅亡であり、アイヌ・モシリ（原始共産社会）は過渡期の共産主義である。

三浦精一氏は「アイヌの問題もわれわれの問題である。日本人の同情に期待しようとせず、アイヌ自身がアイヌ・モシリのために立ち上ってほしい」と言っているが、アイヌは決して日本人の同情など期待してはいない、むしろアイヌは日本人に同情しているのだ。何故なら、日本はもうじき「滅亡」するのだから。又、日本人はアイヌ・モシリ建設の主体とはなりえない。

アイヌ・モシリ建設のために闘う日本人は、売国奴として、アイヌ・モシリの手先としてのみ存在しうるので

ある。

「日本」の滅亡なしに日本人とアイヌ（及び一切の被抑圧民族・人民）との「敵対関係」は止揚されることはないのである。

バクーニンの「総破壊」は原始共産主義の建設であるわけであるが、彼はマルクスに反対して、都市下層プロレタリアート（マルクスによれば「ルンペン・プロレタリアート」すなわち、「旧社会の最下層からうみだされるこの無気力な腐敗物……むしろよろこんで反動的陰謀に買収されやすい連中」（共産党宣言）及び貧農を革命の主要なエネルギーであると考えた。

彼は、植民地人民、及び原始共産制に生きる人々を見い出すことはできなかったが、しかし彼のこの方向性は正しかったのであり、この点においてもバクーニンは評価されねばならない。

我々の斗いは最も搾取され、最も抑圧されている人民に依拠するものでなければならぬ。

「日本」及び「正常」で「健全」な「日本人」に搾取され差別され抑圧されて来た人々、アイヌ・朝鮮人・台湾人・沖縄人・部落民そして身体障害者・精神異常者、

その他一切の「異分子」は「日本」を破壊しつくし、征服するだろう。

総破壊を！ 廃虚の上にアイヌ・モシリ建設を！

附記

清水君の手紙には、「らじかる」か「リベルテール」にでも載せてほしいということだった。「らじかる」の方にはスペースの都合で何回かに分載ということになってしまい、それよりも一挙に掲載した方がいいと思い、途中にリベルテール批判などもあるが、他に、載せるあてもないし、折角獄中で勉強している清水君にも申し訳ないので、「リベルテール」誌にたのんで載せてもらうことにした。仲間と隔てられた所で、一人で思考するということとは、考えもなかなか進まず、独善非現実性に陥るということもある。この清水君の論文に反論、讃同、具でもいい、送ってほしい。本人もそれを心待っています。

（西塔）